秋田から

秋田からの手紙は、すべて中村しげ子君宛てになつてゐる。刑務所の都合を考慮して、發信受信ともに、同君を煩はしたのである。

――編　者――

◇

【大正十四年十二月十三日】

漸くの事で此の手紙を書かせて貰ふことになつた。九月以來だから、一寸久し振りだ。皆々無事壯健の事と信ずる。

先達つて、近藤君と共に桂（望月）君が面會に來てくれたのは、大いに嬉しかつた。厚くお禮を言ふ。近藤君へは殘念ながら發信は許されない。逢つたついでによく禮を傳へてくれ。面會の時に兄貴が見て行つた通り、僕は此處へ來てから更らに太つたやうだ。十月に一寸痔をやつたが、直ぐ快くなつた。其後、大いに丈夫だ。安神あれ。

面會のとき尋ね落したのだが、僕が東京で最後に出した戲畫の手紙や、萬年筆や、僕の遺筆『鐵窓三昧』『あくびの泪』など皆な屆いたかね。それと、松谷辯護士に宛てた分（『死刑を直視しつつ』）は、今度の事件に對する僕の感想の唯一のものと信じてゐるので、心懸りだ。

本、筆墨は、規定によつて入獄後六ヶ月、即ち來春三月下旬でないと許可されない。それも、行狀善良、作業課程終了の者でなければ駄目だ。僕は、行狀は優等だと稱されてゐるが、作業課程は半分しきや出來ない。三月までには是非終了に達せねばならぬので、當今はそれに一心不亂だ。何にしろ、君も知つてる通り、僕は本を讀まねば生きてゐられないといふ困り者なのでねえ、呵々。

ところで、筆墨は所持金で買へると思つてゐたのだが、十圓以上持つてゐないと使へないのださうだ。で、三月中旬までに十圓送金してくれないか。そして、その序でに、改良半紙百枚、毛筆細字用二本、雜記帳五册をも郵送願ひたい。本は既に取揃へてある對譯英文叢書の中で極くやさしいのを四五册と、原書では、一度東京の獄へ入れて貰つた『ライフ・オブ・デス』と、社にあるファブルの通俗科學叢書の中の（天文か物理の分）一册と、都合二册願ひたい。和文のものは當分いらないが、俳句集を一册是非欲しい。探して買つてくれ。後はまた後だ。

先達て東京區裁判所から書類が此處へ來て、僕に、大正十年何月とかの裁判費用一圓五十錢を支拂へとある。飛んだ古い借金を見つけ出されたものだが、よく分らないから山崎（今朝彌）君の處へ廻送して貰つて置いた。もしあれが當然支拂ふべき金で、そして山崎君が立てかへて支拂つてくれたようなら、これも濟まないが返濟して置いてくれ。無料辯護をさせた上に、裁判費用まで支拂はせちや、ちと氣の毒だからなア。

キミちやんは來年から確か學校だなア。「久バカを忘れちやいけないよ」と傳へてくれ。

大ぶ寒くなつたが、まだ雪は積らない。毎日々々殆んど風と霙と霰ばかりだ。例年十一月末から雪が降り出して十二月初旬には可なり積るんださうだが、今年は暖くて未だ積らないのださうだ。今日なんか餘程寒く感ずるが、寒暖計は十三度ださうだ。去年の今頃は四五度だつたとの話。寒に入れば零下五度位いの由。しかし、寒さよりも毎日の陰鬱な天候には大閉口だ。雷がよく鳴る。北國は、夏でなく、冬に雷が多いのださうだ。風は隨分はげしい。大風の日には、日本海の沖鳴りが聞へる。部屋は廣くて清潔だ。窓は東京の方を向いてるから、西日が少し差入るので嬉しい。が、見えるのは空ばかり……それも一週間のうち五日まで風雨か曇りかだ。鴉と鳶が多いやうだ。鳩も少し居る。雀は少ない。

東京監獄では平均一日に二通の手紙を受取つてゐたのに、此處へ來てからは一回もまだ來ないので大いに淋しい。返書を待つ。しかし、東京でのやうな譯けには行かないから、手紙の文句は、よく氣をつけて愼重に願ふよ。折角くれた手紙が讀ませられないやうな事があつては、余りに殘念すぎるからなア。では、又、次ぎは二月だ。皆んなによろしく。

近詠二首

壁の上にぢつと動かぬ蠅一つ冬をや眠る息

やとだへし

壁の上にぢつと動かぬ蠅のごと我れも命を

此處に終るか

返事をくれる時、一寸姫路の兄の處へハガキを出して、書き添える事はないかと尋ねて見てくれ、お願ひする。

◇

【大正十五年二月十一日】

一月十三日附貴翰十八日拜見。お察し通り、始めは雁の如く、次に鶴の如く、時經つては麒麟の如く、大いに伸首して待てり。しかも披見に及んで、僕よりの依賴せし事情の爲めに遲れたるを知り、恐縮、大恐縮、首は忽ち龜の如く引込み了んぬ。思ふに國元の兄共、僕達との文通を氣味惡しとや思ふ爲めなるべし。又是非もなからんか。以後は不問々々。

僕の手紙集發刊のこと素より異存なし、萬事お委せせん。たゞ編輯者の參考までに我見を述べんか、手紙の提出は各持主の自由意志に任せ、しかも駄文、樂屋落ち等の抹殺に意を用ふべき事。廣く集むべき事。近藤君に編輯の後見を願ひたき事。俳句和歌の類の、後に改めしもの多くあれば「あくびの泪」「鐵窓三昧」等によつて夫々訂正されたき事。從つて江口渙君の出版を引受けられし「句集」發刊は見合すべき事。若し寫眞版の企てあらば、例の「蠅よ跳れ……」を願ひたし。顔の寫眞は嫌々。へちま（望月）君に簡單な面のデッサンでも願へればよし。書名は『獄窓から』など平凡でよくなきや。猶ほ淋しければ多くの人の短い氣の利いた「久太漫評」でも乞はんか。如何。……然し隨分本屋泣せの事なるべし、呵々。

単衣にレインコートの寫眞の僕に、福子さんが暖くビロード服を着せて下されし由、お蔭を以て極寒の獄中に在つて風邪一つ引かず、有難う!! 彼の寫眞は、逗子でも鎌倉でもなし、同じ相州の鵠沼也。確か十年の夏なりしと憶ゆ、大杉と共に鵠沼東屋旅館に滞在して「昆蟲記」飜譯の助手をなせし時に、大杉が遊び半分に寫せしものの一つなり。いま當時を追想し轉た感なきあたはず。魔子にも愉快なりし記憶の一つなるべし。

山鹿（泰治）第二世出生し直ちに犬次郎襲名と聞き一首あり、曰く、

悪因に悪果のありてくくり頤

兩手の手首を輪の入るらむか

この歌、氣の弱いお美賀さん（山鹿の細君）には極内々々。

送附を賴んだもの全部送るとのこと感謝に堪えず。ところで、もう少々無心を附け加ふ。半紙百枚を二百枚と訂正。東京監獄で使用してゐた「辭林」と年鑑とを同時に願へれば幸甚。古田（大次郎）君の遺稿も見たし。先きに依頼せし「俳句集」、もし適當のもの見當らねば、久米正雄君に僕が賴んだと云つて、碧梧桐選の「續日本俳句鈔」二册を借りられたし。

小生の作業振り、其後、刮目に價す、御安堵あれ。即ち謹賀新正の餅の力、御馳走の力により $1\frac{1}{2}$ の能力は忽ち $3\frac{1}{5}$ と進み、加ふるに懐中湯たんぽを二個抱かさるに至り更に $2\frac{1}{3}$ に騰り、二月に入ると同時に、課程の頂上に登りては落ち、登りては落つといふ姿なり。今一息、今一歩。

僕の健康に對する奥山先生の御注意厚く受く。深く謝すの旨、傳聲あれ。禪書は讀めど、寒時には身を寒殺する底の悟道には達せず、靜座、屈伸法、冷水摩擦を用ひて寒威と善戦なしつつあり。但し、苦笑を浮べて小音に申上ぐらく、大寒に入りて流石に些さか屁古垂れ、四五日前、輕き腦貧血の氣味にて一日横はれり、從つて體重も少々減少。されど未だ、東京時代よりは太り居れば安神あれ。寒さの峠も既に越えしやに覺ゆ。積雪三尺を越えず、秋田としては例年になき暖冬といふ。こんな事で最初の冬を通過出來れば、先づ幸ひとすべき也。

折々我家を訪問給はる教務主任、一日訪ふて曰く、『ホホー、だいぶ雪が吹き込んだナ。いや、これが秋田の不思議ぢやて。二重硝子の所でも矢張り吹き込んで來るのぢや、不思議ぢやナ、ハッハッハッ……』と。けだし、秋田蕗よりも此の方がお國自慢のやうな口振りなり。されど、秋田を初めての小生には、不思議はこれのみにあらじかし。布に包める膝小僧の凍傷。夜、着布團の表皮の濡れることなど、可なり小首をひねらされたり。兼ねて聞き及びたれど、雪雷、氷雨、怒濤の如き烈風も珍らしく、雪の凍りついた窓硝子の美しさにも驚きたり。

雪氷雨吹き込む窓を賴みかな

水濹や冷々として骨を滴る

湯婆を抱いて更に愚とならむ

今日は紀元節で、御馳走を食つてお休みだ。恨むらくは相變らずの曇天强風。君からの手紙 No. 4 の初め三行ばかり悪かつたらしい。御注意々々と申す。

狂體一首　柿色囚屋（かきいろのひとや）鷹（たか）

足引きて首をちぢめて雪の降る

寒む寒むし夜を獨りかも寐む

◇

【大正十五年四月十一日】

三月廿七日附の手紙有難く拜見、金十圓も確かに落手した、厚く御禮を云ふ。古本屋の探し歩き、内閣の爲めの司法省通ひなど、忙しい中を全く濟まない。

手紙によると、其の内に國元から兄か母かが秋田へ面會に來るかも知れないとの事だが、大いに困つた。東京から最後の手紙を姫路に送つた時、久太郎は死んだものと思つて決して面會になんか來て下さるなと、かたく斷つて置いたのに、全く困つた。此の上の面會は、ただ兩方でより多く心を痛めるに過ぎない。母の心持、兄の氣持はよく了解してゐるが、わざ〳〵面會に來てくれる事は、僕をしてより多く心を苦しませるばかりだから、どうか來てくれないように、僕の心持を、も一度よく姫路へ傳へて欲しい。假りに苦しい中から旅費を作り得たとして三百里近い奥地への旅を、どうして七十歳からの老母が爲し得よう。兄が來てくれるとしたところで、彼は今病身である。而もその腕一つで、僅かの勞銀で、一家を支へてゐる體だ。僕がどうして此の兄の面會を望まうや。よく斷つてくれ。そして、體は丈夫で愉快に暮してゐるから、決して僕の事は心配してくれるな、安らかな老後であらむ事のみ切に祈つてゐると傳へてくれ。くれ〳〵も賴んで置く。

五月に君が面會に來てくれるといふなら、これは遠慮をしないで嬉しく厚意を受けよう。昨年九月以來の久し振りの面會だ。職業婦人君の勇姿と艶顔に接し、元氣よく太つた僕の體をお目にかけよう。その日の、春天麗かならんことを期待しつゝさ。

手紙集に對する僕の唯一の希望は、來信一束によつて、總ての手紙を集めて欲しいといふ事である。これは手紙の種類の多趣ならん事を期する爲めと、人一倍に「多樣性」を帶びたところの「久太」を充分表現したいからである。例へば、ボルの人達に送つたのも、朝鮮の魚海少年に送つたのも、大阪の不良連に送つたのも、魔子に送つたのも、それ等のもの總べてを集めて、そして其の上で近藤君の取捨選擇を煩はしたいのだ。

市ヶ谷刑務所で書いた「感想」を附加する場合は「死刑を直視しつつ」「後事賴み置く事ども」「悲痛の快味」「泣くな!!」「句作の思出」の六種だけにして置いて欲しい。久太年表は使はないがよからう。「思出の記」なんか勿論駄目さ。

「久太漫評」は、頁が許すなら、卷末に六號で並べて欲しい。僕の希望する人名を左に書いて

見る。隨分澤山だから驚くな。

近藤憲二　岩佐作太郎　△古河三樹松
川口慶助　水沼辰夫　山鹿泰治
延島英一　和田榮太郎　△堺利彦
堺眞柄　山崎今朝彌　布施辰治
添田啞禪坊　伊串英治　淺原健三
城田德隆　中名生幸力　中村還一
△宮島資夫　江口渙　加藤一夫
△大杉魔子　望月桂　△望月福子
中村しげ子　△望月公子　魚海

先づこんなものだ。△印の六名には是非賴みたいな。公ちゃんには、しやべらせて親爺が筆記すること、其他、有志があるなら幾ら多くても好い。

裝幀は近藤君の意見に總べて贊成。ただ「宗匠式」だけは眞ッ平御免だ。變に氣取つたり、すね味を現はしたりしないで賴むよ。藝術味は大いに欲しいが……。

公ちゃんが『キュウキュウネズミ』の童謡を時々唱つてくれるのは大いに嬉しいナ。そのうちに筆墨が許されたら、今度はもつともつと面白い、上手な童謡を書いて送るよ、と云つてくれ。そして、その内に學校で字を習つて、片假名が書けるようになつたら、久をぢさんに手紙をおくれ、と云つてくれ。

一句、公ッペイの入學を祝する。

悪戯も男兒に負けな春の風

『人』といふ刑務所の雜誌は四六四倍版八頁もので、中々面白いものだ。「社會の人が讀んでも、少しも嫌やな氣持にならないものを作りたい」と編輯者は云つてゐるが、なるほど編輯は中々苦心されてゐる。雜誌の編輯では可なり苦しんで來た僕だが、實に鮮かな編輯ぶりだと大いに感心してゐる。政界の記事もある。科學の記事もある。福子さんの好きさうなお話や詩も澤山ある。僕はこの雜誌を望月家に於ても購讀され事を希望する。僕がどの位いの程度で社會の事を知つてゐるかといふ見當も、そちらでつく譯けだ。

鐵（中濱）君がまだ生きてゐるなら『笑つて死ね』と傳へてくれ。そして「久太漫評」でも書かせて置いてくれ。

古田君と市ケ谷で最後の會見をやつた時、僕が「君の死ぬ時には好い天氣であるやうに祈つてゐるよ」と云つたら、彼は「ウン……しかしこんな薄曇りも靜かに落着いていゝと思つてゐる」と云つて、窓外を眺めて淋しく笑つた。僕は薄曇りの日には、よく古田君の、あの淋しい顔を思ひ浮べる。

秋田は、全く餘寒の長い所だ。三月に入つてからは雪や霰は降りながらも太陽は春めいて來て屋根の雪が解けはじめ、庭の雪がすつかりなくなつたのは三月二十八九日頃だつた。ところが、四月に入つてから又々寒さが後戻りして、三日と五日には雪が積つた。東京は三月中頃に花が咲いたさうだが、此處はまだ、梅の花すら咲かない由。二十日頃に梅も櫻も桃も一時にぱつと咲いて、直ぐ花の春は過ぎて了ふのださうな。

しかし一昨日邊りから大いに暖かくなつた。濃青の空を眺めて喜んでゐる。十二月末に漸くゐなくなつた蚕が、三月中頃から既に活動し始めた。元氣な蟲だ。南京蟲はどうやら居ないらしい。

或る禪の本の中に、

『京の四條橋の上に乞食ありけり。弟の乞食、兄なる乞食を顧みて、橋を渡り行く立派なる武士を指し、わしもあの樣な武士になりたい、と申せしところ、兄の乞食は首を振り、いやいや、あの武士は、あんなに立派に見えても、心の中は色々苦しい思ひやわづらはしい事で一ぱいぢや、それよりも何んのくつたくもない俺達乞食の方が結局氣樂で結構ぢやと申しき。その時、傍に臥しゐたる親爺の乞食、むくむくと起き上り、その氣樂な境涯には誰れにして戴いたのぢや、と申せしとなん』

といふのがあつた。僕には大いに氣に入つた。そして、窓から空の美しさに恍惚と見惚れるとき「囚人ならではこの美しさは味へまい」と獨言し、更らに「その囚人には誰れにして戴いたのぢや」と乞食の聲色を眞似て、獨りで悦に入つてゐる。

一椀の鹽茶待たるゝ氷雨かな
ふと開けさの雪がこぼれた桶の水
屋根の雪のとどろと落ちて搖るゝ陽や
空へひたと顔つけて春を讃えけり

◇

【大正十五年六月十日】

君からの手紙は一日に落手した。そして去る六日に一度返書を認めたのだが、天候ならぬ天候が暴れて、雨があり、風がありした揚句の果、且つお叱りを受けた上、こゝに再度の手紙を書くようになつたのである。實を言ふと冬にも一度二度こんな事があつた。が、心配するといけないと思つて知らさなかつたのである。しかし、この手紙は、最初にこの事を書いて置かぬと後に書く事が徹底せぬから書くが、決して無謀はせぬから其の點は安心して、ただ以下の文意を、所謂眼光紙背に徹して、頭で讀まずにハートで讀んでくれ。

僕からの手紙は、今後雜誌に決して發表しないでくれ。ただ是非とも『勞運』にだけは發表せねばならぬ場合は、極く簡單な消息だけ拔き書きにして發表してくれ。でないと、今後僕の

手紙や俳句などがそのまゝ世間へ發表さるれば、「受刑者に社會の雜誌の原稿は書かせぬ」といふ理由から、君との文通は「嚴密に是非必要用件の外は書かせない」と申渡された。句や歌は勿論、公子に章句を書くこともいけなく、且つ一寸した感想にしても「原稿じみる」の一言で片づけられる。知つての通り、不平や不滿は勿論書かされない。さうなれば、「僕は毎日嬉しく感謝に滿ちて働いてゐる。皆んなに變りはないか」と二ヶ月に一度書けばお終ひだ。そんなものなら僕は書きたくない。手紙をやらねば皆んなが心配しよう、僕にも樂しみや慰安がなくなる。……かういふ譯けだ。そして、「決して雜誌へ大びらに發表させぬ」といふ誓ひの下に、この手紙及び今後の通信が今まで通り出來ようといふのだ。

そんな馬鹿な事があるかッ。和田もそんな腰拔けになつたか!! 卑屈だ!! と嘲罵する者が若しあつたら、和田は其の嘲罵を笑つて甘受する、と答へてくれ。

君からの手紙も、いつでも可なり切り取られる。殊に今度の手紙は、「社會の出來事を澤山書いてあるから不許にする筈だが……」とて渡された。君は何枚書いたか知らぬが、僕の見たのは三枚だ。それに、二三行の切つ端が二つ三つくつつけてあつた。それだけだ。あれに望月が九州へ行つた事と、ルイズの事とが少々あつたので、僕は破り棄てた先の手紙に「マコの樣子を知らせ」と書いた。ところが、これもいけないのださうだ。「大杉の子供の消息などは斷じてならぬ」といふ所長の意見ださうだ。この時ばかりは僕も口惜し涙がこぼれた。僕が大杉の子供の消息を知つちゃいけない……何んといふ事だらう! と思つた。

が、だ。が……僕はこれもあきらめる事にしたよ。ウン、あきらめたよ。だから、大杉の子供の事も今後知らせてくれても無駄だ。見せられない。同志の消息なんか勿論駄目だ。時事問題も知りたくない。『人』と『新聞年鑑』で澤山だ。書いて來るのは止してくれ、無駄だ。君自身のことでも、今後は澤山書いて來てくれ。君のいろんな感想もよからう。公つぺいの惡戯ぶりや、望月が商賣に精出さない、繪も書かない、そのグチもよからう。世間の事でも、地下鐵道が出來たの、尾上榮三郎が死んだのはよからうぢやないか? 庭の草花は今年はどうだい。待宵草も大きくなつたかい。お地藏さんはどんな顏をしてゐるかい。……まあ、そんな事でも面白可笑しく書いて來てくれ。僕も亦、雀や燕のいたづら振りでも書かうよ。胸につかえたり、腹に溜つたりする事は、すつぱり忘れよう。……これが僕をして『短氣を出さしめない、負け嫌ひをつつぱらせない』何よりの藥だ。そして『忘』と『無爲』の妙味を說く禪書にでも親しみながら、けり、かな、とやつてゐよう。

同志との交渉を强制的に斷つたなら、それで和田の心がすつかり變る——長い内には——といふのが刑務所の自信だ。僕はただ、これに對して『微笑』をもつて答へるのみだ。

『和田君、たとへ無期懲役でも、あくまで生きてゐてくれ。決して自暴してくれるな。君に長く生きてゐよと願ふのが、如何に慘酷であるかは、我々は充分知つてゐる。君が死刑を望む心持はよく分る。だが我々は、あくまで君に生きてゐて欲しいのだ。』

と、岩佐君は云つてくれた。言、なほ耳底に在る。如何に僕が「負け嫌ひ」だつて、君の心配するやうな、「病氣になつても藥を飲まない」といふやうな事は勿論ない。大いに自重してゐる。運動には三十分間庭を歩くし、毎晩自疆術をやつてゐる。體重が社會にゐる時よりも增した（これは決して負け惜しみやなんかぢやないよ）のが、何よりのいゝ證據だ。安心し給へ。

（以上九日夜記す）

×

今日は李何んとか王の國葬でお休みだ。伸び伸びした氣持で此の手紙を書く。

今、昨夜下附された『禪學講話』を何氣なく開いて見ると、卷頭に、人間萬事不如休、馳逐東西到白頭、息影山廳閑座睡、自然無喜亦無憂。人間萬事不如休、交友多同風馬車、歸去來兮何處是、白雲影裏一林丘。人間萬事不如休、此句能醫我百憂、勝彼神仙眞秘訣、永言畢世銘心頭。とある。久太子、夫れ休せよ、忘ぜよ、か。苦笑々々。

作業課程は四月に及第し、五月十五日から私本も讀め、筆墨も許可になつてゐる。雜記帳ガラスペンを瞞求し、英語練習の傍ら『孤囚漫筆』と題して感想や駄句を書いてゐる。だから此の手紙着次第、既に買ひ整へてある筆紙類と井上和英辭典と年鑑とを取敢えず郵送してくれ。

近藤が司法省へ內翰に持つて行つてゐる本が、何故二ヶ月も三ヶ月もグヅ〳〵するのか、實には不思議でたまらない。が、今日只今、はつきり明瞭になつた。本の內容、內閣如何が問題ぢやないのだ。持つて行く、賴みに行く、近藤といふ人間が惡いのだ。もうもう、近藤君に司法省通ひはやめて貰つてくれ。無駄だ。僕は決心した。近藤君に『行刑局の自信を尊重しようぢやないか』と傳へてくれ。

武藏野（宮崎光男）の家は皆な變りはないか。休みには又、時々遊びに行つて、あの邊の景色の移り變りも知らせてくれ。あの家の二階の窓、安養寺の森の梟の聲、庭のすずかけの花や畫顏の花、さては辨天池の行々子、蛙の聲、杉林の蜩の夕……いつも夢のやうに憶ひ出される。

先づ今日はこれで止す。この次ぎの君の手紙は、來月少し早くくれ。待つてゐる。

◇

【大正十五年八月十二日】

八月二日附お手紙、福子さんのも、總て全部拜見。感謝々々。

福子さんお芽出度のこと、大いに歡ばし。君のてんてこ舞、お察し申す。小生への面會斷じて急ぐの要なし。姉上御安產を芽出度く相濟ませ、白雲曖流す四五月の頃、ゆつくり來られたし。此の義、かたく申置く。

小生身體、元より健。廣き雜居房を一人にて占有し、白麻の蚊帳を吊り、赤き團扇を手にし、丹田に氣を滿し、ボン〳〵と叩きながら大の字に臥り申す。夜おそくまで原稿紙を汚し、猶且

つ飯の食ひ兼ねる輩、よろしく我れを羨むべし。のんきに超然と生きてゐるには、禪の遊戯三昧、最も面白きやうに思はる。來春三月まで英語中止と心に定め、それまでに大いに文字禪をやつて見るつもり。

七月初旬、紙、筆、雜記帳、落手。同末日、「井上和英」「年鑑」落手。多謝々々。「續日本俳句鈔」ゆつくりでよし。金澤の「辭林」は、「和英」があれば入用なし。あの本、宮崎に三分、僕に七分の所有權あり。現代の風潮に鑑み、我が權利の大なるをたのみて、彼の本を獨斷にて賣り飛ばし、代りに「割引」字典の古いのを買つて欲しし。「寒山詩集」が借りられたのは嬉しい。これも共に送られたし。小石川の丙午出版社で「中外叢書」の第一篇「禪室茶談」、第八篇「禪話擔板漢」の二册を買つておくれな。各々定價三十錢、合計六十錢。活動行き一回御ケンヤクあれ、呵々。

「……地下鐵道の話は聞いたんですか」なんて、寒呆けちやいけない。それどころか、太陽の黑點が最近龜裂となつて現はれたといふ、天文學界の報告まで御存じだよ。だから言はぬことぢやない、僕の讀んでゐる雜誌『人』を購讀なさい、と。太陽面龜裂の加減か、梅雨中は暑く照り、土用はぢめ〳〵雨。ハツハツハツハツ。

次の文面、小諸の福子さんに見せて欲しい。

福子さん。

久し振りのお手紙嬉しく拜見しました。先づ第一に、八年ぶりの御懷姙をお喜び申し上げます。いま五ヶ月といふと、御出產は來年の一月早々ですな。お歡びなさい、寒中に生れる子は丈夫だとか言ひますよ。東京の事なんか考へずに、藤村の「千曲川」の詩でも歌ひながら、信濃の山水の中へ全精神を溶かして了ひなさい。さうすると、きつと安々と產めて、立派な子供が「天上天下唯我獨尊」の第一聲を揚げます。

公ちやんの左利きは、飽くまで左で押し通すのも面白いと思ふんですが、學校で許しませんかナ。今の學校の成績なんか、出來ない方が好い位いのものです。今の學校で成績のよい子は、頭でつかちの、色の青い、ひよろ〳〵した人間に仕上ります。そんな事は決して心配しないがいゝんです。氣まゝに、のんびりとお育てなさい。コセ〳〵した育て方の害惡は僕がいゝ手本です。全くですよ。

まアお大切に。また書きます。姬路へ手紙を出して下さると見えますね。厚く御禮申上げます。僕は大丈夫、御安心下さい。

みなぬちにまな子や動く夜をこめて響く子
曲の水を嬉しみ
垂乳根の母がみもとに垂乳根の母と呼ばれ
む愛子產ますも

◇

【大正十五年十一月四日】

先月二十五日附手紙拜見。秋田へ來てからの僕の手紙が、毎回「ガツカリ」さしてゐたのが、この前のは「ピツタリ」して「皆んながやつとホツトした」といふのかね。結構々々。「ペツタリ」腰を拔かして「皆んながホツとなる」やうな手紙を差上げちや申譯けがないからな。ますます禪の本でも讀み、大いに修養して、大いに落着いて見せようよ。安神しな。今月の九月一日には「人の問はば秋の黃雲を指さゝむ」と一句呟いた。確かに落着いたね。

刑務所でも、僕がやゝ落着いたと御觀察に相成つたと見え、愛ねてよりお願ひ申上げて置いた「機織」を許可され、愈々此の一日から久留米がすりを織ることになつた。仕事の出來ぶりが水平線に達するまでの三ヶ月か四ヶ月間かは多少苦しくもあらうし、又不自由を見ねばならぬのだが、しかし「靴下の先かがり」なんかよりは、いくらいゝか知れやしない。第一、趣味があるからねえ、仕事に。ハゲ……ぢやなかつた、枯芒頭の兄貴流に言へば「藝術味」がたつぷりあるといふものだ。それに、運動不足を來してゐる體の爲めにも確かにいゝと思ふ。

雀が歌ふ窓の下で、バツタン、バツタンと織り方を稽古してゐると、阿部保名と葛葉狐との色模樣を思ひ出す。蘆屋道滿大內鑑……もうあんな古い狂言は永久に演じられまい。信田森の葛葉狐といふのは實ょエタ族の女である……てな事を云ふのは理屈ぽくつていけない。昔の芝居の妙味は、理屈を言ひたがる奴には分らない。菜の花の咲き亂れた百姓家の窓で、狐の化けた戀女房葛葉が物思はしげに機を織つてゐる。彼女は先きつ頃、一子（後に有名な阿部晴明とある）を產み落した……。

一子を產み落した、と言へば、こんど生れる子供の名を附けてくれといふ事だつたな。よろしい、よろしい。僕はこれでも既に二人の名づけ親だからな。第一は山川均夫妻の振つた作物たる「振作」君。第二は現今仙臺の在所に居る有名な「中名生芋作」君。二つとも實にいゝ名ぢやないか。そこでと……若し男子ならば「おふく」の子だから「ひよつとこ」……ではちと可哀さうだな……「空美」はどうだ。「あきよし」とでもこぢつけて讀ませばよい。そして若し女だつたら……やつぱり「空美」さ。女らしく「うつみ」とでも讀ますればいゝぢやないか。別に意味はない。僕は「空の色」が好きだからだ。

キミちやんと、キミちやんの仲よしのお友達に送るのに丁度いゝ童謠を二三日前作つた。

あられ
寒むい、寒むい
お空から
きれいな霰が

落ちて來た。

子供雀が
二羽、三羽
お庭へ拾ひに
とんで出た。

母さん雀は
お家から
『コレ〳〵寒むいよ
冷めたいよ。』

大杉全集は完結したし、マコは公ちやんと遊べるやうになつたし、もうこれで何等心にかかる事はない。近藤君に『感謝に堪えない』と傳へてくれ。そして、僕の本なんか、決して無理をして出さないようにと、よく云つて置いてくれ。自費出版なんかで、あんなものに社の大切な金を使つては申譯けがないから。

今年は去年よりは、少々寒さが早いやうだねえ。昨年の雪は十二月になつてからだつたが、今年はもうそろ〳〵降り始めさうな樣子だ。霰は十月の初旬から降り出して、此頃は毎日のやうに氷雨が降つてゐる。

子供の時にやつたきり長らく忘れてゐた齒痛を、先月珍らしく覺えた。今、外部の醫者にセメント充塡をして貰ひつゝある。白髮は、もう完全に胡麻鹽にまで進んだ。おまけに、額のところが少し廣くなつて來たから面白い。

鳩は高く秋氣の流れのぼるらし
朝寒むや蠅に刺さるゝ青頭
體操の汗拭いて蟲に獨り寢る

◇

【昭和二年一月九日】

手紙を見て先づ何よりも喜んだのは福子さんの御安産である。男の子で、しかも八百八十匁もあつたとは、何んといふ有難い事だらう。實のところ、僕も福子さんのお産は、また大變なのぢやあるまいか、どうか安らかに產んでくれゝばいゝがと、こんな所からでも、役にも立たない心配をしてゐたのだ。お芽出度う!! も一つお芽出度う!!

「名前の頭が空ウぢや頭がからつぽのやうで」……とは御尤も千萬。實は、僕は近頃禪の本を嚙るものだから、空ウといふ字に却つて興味を感じてゐたのでつけたのだつたが、成る程、からつぽと取つちや嫌やだらうて、ハツハツハツ——。しかし「明美」は上等だ。殊にいゝ月が出てゐたから思ひついて……とは氣に入つた。贊成、贊成!

赤ん坊の生れた時は、まるでお猿さんのやうな顏をしてゐるものだが、しかし、もう今頃はそろ〳〵白くなつて、笑ひ顏を見せてゐる事だらうと思ふ。公ツぺいが姉さん振つて抱きたがつて大變だらう——。何かお祝ひのものをお贈りする筈だが、仕方がないから、例によつて俳句だ、俳句だ。

寒月に凜と生れた男の子哉

藝術的なハタオリは、廿日ほどやつて止してしまつた。久留米かすりを三丈二尺織り、初めのものとしては實に上出來のかすりである。初めからこんなによく出來る人は珍らしいと技師から褒めて貰つたほど、それほど得意であつたのだが……止してしまつた。何故かといふに、ハタを織り始めて二三日すると、脚氣のやうに急に足がむくみ出した。オヤ〳〵と心配したが、しかしそれは間もなくなほつてしまつた。ところが、その內に又、今度は胃の調子が馬鹿にいけなくなり、かがんでばかりゐるので、胸の邊も痛くなつて來た。で、折角僕からお願ひしてやつとの事で始められるようになり、大いに樂しみにしたハタオリなのだけれど、又もとの靴下かがりに還へして貰つたのである。

僕は最近徹底的に落着く事が出來るやうになつたやうに感ずる。外の事も大して氣にしなくなつたし、頭に詰め込んでゐる生半熟な學問の片々など、すつかり捨てゝしまひたいと思ふようになつた。その內に賞與金が溜つてくるから、年に二册の本は買へる事になる。だから本の事もそれで澤山だと思ふやうになつた。一切の通信を斷たれても、心靜かに、落着いて生きてゐられるといふ自信もついて來た。その點も決して心配してくれるな。

◇

【昭和二年三月十三日】

先月廿五日附の手紙、嬉しく拜見。

恩典は豫期しなかつただけ、それだけ喜びも大きかつた。君の言葉の如く、これで『どれだけ心丈夫か知れない。』たとへ十八年後の遠い遠い所にでも、兎にかく一點の光明が認められるやうになつたのである。その遠い所の一點の光明が現在の心持の上に照り輝く力は大きい。私は嘗ての遺言的な一文の中に「この體は三年はもつまい」と書いて置いた。が、當所へ來てから、だん〳〵「なるに、さうでもない」といふ自信が出て來、更らに此の度びの光明によつて、再び社會に出られるかも知れないと、夢が樂しめるやうになつて來た。喜んでくれ。

いま私の讀んでゐる『旅人芭蕉』といふ本の中に、次の如き文章がある。

『自分も隨分迷つたものだ、もがいたものだ、希望から焦慮へ、困憊から懊惱へ、人間として

嘗めなければならぬ苦しみは大概味つて來たのだが、……それは、譬へば日蔭もない野を、ぐんぐんと毎日歩き續けてゐたやうなものであつた。そして、それは生きるために唯一つの道だと思つてゐたのではあるが、今から考へれば、自分は生きようといふ意志にむきになり過ぎて却つて本當に生きられなかつたのだ。自然のまゝに生かして貰ふ、といふ受身の氣持になりさへすればいゝのであつた。……』

近頃は斯ういふ言葉に、しみじみと親しさを感ずるようになつた。

「獄窓から」が三月に出版されるとの事、諸君の盡力、殊に近藤君の骨折りを厚く感謝する。出たら早速送つてくれ給へ。が、集められた僕の手紙の中には、キザなのや衒氣たつぷりのや、獨りよがりなのや、興太なのや、いろいろ、今讀むと自分で自分の顏が赤くなるやうなのが多いだらうと思ふと、聊か恐れ入ると云つたやうな氣持も起る。しかし何んと云つても、僕の心持は嬉しさで一ぱいだ。鶴首して待つ。公ちやんの漫評が早く見たい。マコも書いてくれたらうねえ。

「古田大次郎遺稿」を「獄窓から」と一緒に送つてくれ。讀ませられるらしいから。

皆んなによろしく。

寂しさを敲きにくるや窓霰
金網を掻き鳴らしけり玉霰
月の碎け落つるとばかり霰かな
躍れ躍れ天の童の玉霰

◇

【昭和二年五月十三日】

二十二日の休日にゆつくり書かうと思つてゐたのだが、勉強して今夜書く事にした。

昨日はるゞ〳〵面會に來てくれた段、厚く禮を云ふ。十日にもまた來なかつたから、「中村の奴め、また例によつて例の如しか」と苦笑してゐたのだつたが……イヤ、御苦勞々々。面會のお別れの時、僕のお禮の云ひよう、ねぎらひようが大いに不足らしい顏付きだつたネ、あの不足分を、それでは此處へ書き足して置く事にする。有難う!! どうも有難う!! 道中お疲れさまで!!

奥山さんには、くれ〳〵も宜しく御禮を申上げてくれ。「あんまり御慰になりすぎて、まごつくばかりです」と。

福子さん。

御手紙有難うございました。公ちやんの事は余り苦にしなくてもよいと信じます。が、「同じ年頃の子を見ると胸が一ぱいになつて」と言はれる母としての貴女のお心持は尤もな事です。

自由教育、個性教育は、申すまでもなく「ただ默つて勝手氣儘にさせて放つて置く」事ではありません。教育ですもの、「教へ」「育て」てやらねばなりません。茶人が鉢植の松をいぢくるやうな教育は排すべきですが、子供の心の根に寄生せんとする雜草は刈り取つてやらねばなりません。又、今日の社會や道德が悪いからと云つても、それの正反對さへやれば必ず正しいとは申されません。ここがむづかしい所です。一度、學校の先生に會つて、よく御意見をきいて見て、研究されては如何でせう。さういふ事は望月君が反對ですかしら? 私もやはり「或る程度まで教へなくては」と思ふのです。

ハゲ君、公君、明君によろしく。

◇

【昭和二年九月二十日】

先月の手紙も四册の本も有難く落手した。そして、三人で姫路へ行つて僕の母を訪ね、ねんごろに慰めてくれた事を讀み、且つ案じてゐた母が非常に丈夫であつた事を知つて、どんなに嬉しかつたか知れない。澤山お禮を云はねばならぬ中にも、特にこの事は厚く感謝する。

今から三ヶ月以後、囚人に對して私本を讀ませる事が絶對に禁じられた。勿論當所だけといふのではなく、全國一般なのである。が、私がこの事を聞いた時の失望と憤慨とがどんなに大きかつたかは察してくれ給へ。行刑局からの一般的達しとあれば、いくら當所長へ掛け合つたところで仕方のない話だとは思つても、殘念さ口惜しさが胸先きへ込み上げてくる。私本が讀めない位いなら、暴れるだけ暴れて暴れ死んでやれ、といふやうな自暴自棄的な考へが高まつて來て、十八日から今日の晝まで暴れに暴れて、トンダ事をしてしまつた。結局・明日私本全部をそちらへ送り返す事にしたのである。で、この手紙の着いてから間もなく、全部の本がそちらへ行き着く事と思ふ。

期間はまだ三ヶ月間ある。けれども、どうせ駄目なものなら、今からすつぱり思ひ切つた方がよいと思ふので、明日送り返す。これは君からの手紙にあつたやうな、ひねくれ根性からでは毛頭ない。誤解せないやうにしてくれ。

◇

【昭和二年十一月九日】

手紙は四日に受取つた。僕の體の事なら決して心配してくれるな。僕の心身にはあの下劑が大いに利いたとみえ、其後は却つてすつかり落着きが出來、從つて體の調子も非常に好い。

本の事も、今では何等の不自由も淋しさも感じなくなつた。口惜しい、憎らしい、せつない」と啼く腹の蟲は、本を送り返した時、一緒に小包郵便の中へ叩き込んで置いた筈だが、なかつたかね? ハッハッ、君の腹の中で、あの手紙を見た時に啼いたのが、即ちそれさ。君の腹の中にまだ殘つてゐるなら、早くセメンの菓子でも食べて下してしまつてくれ。

とは云ふものの、そこは凡夫でね。そりや時には、ア、あの本が讀みたい、「年鑑」を見て社會の移動相を觀じたい、と心がおり〳〵する事もあるさ。けれ共、近頃では、さうした欲望の爲めにおり〳〵と惱む時の自分の姿の背後から、その惱める自分の姿を、慈愛に滿ちた眼でぢつと眺めながら護念してゐるところの、第二の自己が現はれて來た事を覺えるやうになつて來た。そして、此の第二の自己の力を次第に强く感じてくる事によつて、第一の自己の其の惱み方がだん〳〵と氣安くなつて行くやうである。安らかな、平和な力をもつ第二の自己が第一の自己の惱み方を、一種の興味をもつてぢつと味ひつゝほゝ笑む時すらある。

此の第一の自己も、第二の自己も、共に自分以外の何物でもない、それは自己の進展の相を二つに分析して見たのに過ぎない、と思ふ時と、第一の姿のみが眞實の自分であつて、第二の姿のそれは、自分の上へ何かの偉大な不思議な力が働きかけて居るのに違ひないと思はれる時とがある。

こんな變な理屈なんか聞きたくもなからうが、一時は口惜しかつたり、狂人のやうに暴れたりしたけれども、今では極く平穏な心持に落着いて、却つて私本のなくなつたのを喜ぶ氣持さへあるといふ事を說明する爲めに書かざるを得なくなつたのでね。

この秋は、こちらは珍らしい上天氣だつたよ。美しい、澄みきつた空が多かつた。まだ今年は雪も降らない。今日なんかも、暖い小春日和だつた。まだ蜻蛉と蝶が一二疋生き殘つてゐる位だ。この分では、今年の冬は去年よりもずつと樂だらうと推測される。今年は隨分と雁を聞き且つ眺めた。

亂れ雁喜々哀々と渡りけり
淋しさを知る雁金の睦まじや
鳴けよ雁こゝは囚屋の空なれば
想ふ事も遙かなる身に雁遠し

◇

【昭和三年一月九日】

地球がガタンといふ響きと共に廻轉して、此間お芽出度い昭和の三年がやつて來た。

さて、お芽出度う。久さんも御年三十六歳にならせられた。君も、ふく子さんも、桂君も、公つぺいも、明坊も、皆んな間違ひなく一つだけ年をとつた事と考へる。すると、明坊は早や三つになつた十露盤だな。ブッ。生意氣だな、たつた十四ヶ月のくせに。姉ちゃんの公つぺいは二年生になれさうか。マコは何年生かな。

五日のお休みに、「クックックックの子守唄」の蓄音機を聞いて、公つぺいもこれを唄つてゐるかなと思つた。そこで、僕が去年の十一月末に童謠を一つ作つた事をも、ふと思ひだしたから、それを公つぺい讓に進呈する。お年玉だよ。

多からす
白く日の照る
多木立
うしろは汚れた
雲の幕
からすがカア〳〵
啼いて行く。

三四羽
五六羽
また三羽
「風がやんだぞ
カア〳〵〳〵」

續いて
五六羽
また三羽
「お山が白いぞ
カア〳〵〳〵」

白く日の照る
多木立
うしろは汚れた
雲の幕
からすがばらばら
飛んで行く。

どうだ、すてきに旨いだらう。感心したなら感心したと、次の手紙の時に「ねのちゃん」に書いて貰つてよこしな。

手紙の時にいつも俳句や歌を書いてやるのに、たまに一度位いはほめて寄越すものだよ。こんどは一回やめるけれど。

「まだ機を織つてるか」なんて、何を云ふんだい。一ヶ月きりでやめたと、夏頃の手紙に群しく書いたぢやないか。もうあれはこりこり。

「大晦日の思ひ出」は面白く讀んだ。さつするところ、近頃また米屋に借金が拂へないな。呵々。
ふく子さん、手紙有難う。次回のを樂しく待つてゐます。
年末、體重十四貫弱。あんまりふえてもゐなかつたつけ。風邪引かず、凍傷出來ず、痔はほんの少し痛い、胃病は慢性、お正月のお餅を食ひ殘した。元日からずつとお粥を食べてゐる。もう癒るだらう。
同封の手紙を姫路へ送つて欲しい。

しんねん、おめでとう、兄さんも、姉さんも、けんいちも、ひでをも、しようぞうも、母上も、みんな、きげんよく、よきとしをおむかへなされたことと存じます。こんなとこでも、やつぱり新年はなんとなくこゝろ嬉れしく、目出度く今年のおぞうにもいはひました。
私は、何のわづらひもなく、また、さむさにもめげず、きげんよく、つとめてゐます故、そのだんは御あんしん下さいませ。めかたは十三ぐわん六百目あります。ただしおやゆづりのしらがは、だいぶん多くなりました。
また時々お便りをいたします。お年の上故、さむさをおいとひ下さい。

久太郎拜

母上さま